

下野
2015.4.24

論 説

とちぎ発 新国立競技場建設

大谷石採用へ高まる期待

2020年の東京五輪に向けて整備される新国立競技場に、本県を代表する石材で、宇都宮市特産の「大谷石」を使

関係者の話では、事業を進める文部科学省や日本スポーツ振興センター（JSC）は「前向きな検討」を明言しているようで、「採用される可能性はある」という。国際的にも歴史的な建造物となるであろう新国立競技場への採用が決まれば、大谷石の知名度アップや地場産業の振興は当然のこと、産地である宇都宮市、本県の国内はもちろん、世界に向けたアピールにつながるの間違いはない。官民一体、全体的に「オール栃木」で取り組むことで、この千載一遇の好機をつかみ取りたい。

本県としては、まずは本体部分に使ってほしいところだが、設計者のザハ・ハニド氏も関心を示しているとの話

も聞かれるだけに、希望は持てる。今、大谷石は安価な輸入材などに押され、近年の出荷量は1万6000トン程度と、最盛期の50分の1程度まで落ち込んでいる。一方、独特の味わいや調湿機能などで見直されつつあり、「海外進出の外食産業が、内装材などに使用するようになってきた」（同組合）。新国立競技場に採用

同時に県内でも、これを契機に大谷石への関心をさらに高めたいところ。郷土には、このように素晴らしい資源があることを誇りとし、地産地消も進め、ひいては地方創生につなげられないだろうか。業界や行政、関係者のなお一層の奮闘を期待したい。

在、業界と市や県、本県の自民党国会議員も加わり、精神的な要請活動を展開中だ。

大谷石は20世紀の名建築「旧帝国ホテル・ライト館」にも使用されており、美観の面からも魅力的な石材なのは実証済み。大谷石内外装材協同組合などは「ぜひ応接室や玄関などに使っていた

大谷石の素晴らしさを広く知ってもらえる」と訴える。実績もあり、決して無謀な求めではないはずだ。

新国立競技場の整備事業は、JSCによると、10月着工に向け現在、実施設計の段階という。大谷石が建物本体

に用いられるなら、遅くとも夏ごろまでには決まり、付随部分などに使われるなら、その後の決定もあるそうだ。

大谷石が建物本体